

# 董永賣身説話の演變——六朝志怪から話本『董永遇仙傳』へ——

中野 清

はじめに

中国には約三百種の地方劇があるといわれているが、湖北省東部・江西省北部から安徽省全域にかけては、黄梅戲という地方劇が盛んな地区である。

『天仙配』はその黄梅戲の代表的演目で、漢の孝子董永の賣身説話を劇化したものであり、一九五九年に映画化され、テレビで繰り返し放映された<sup>〔1〕</sup>。ちょうどテレビの普及期にあたり、街頭テレビで黄梅戲『天仙配』を観たという人は多い。その大団円で唱われる『樹上の鳥兒』は、元氣の出る歌として歌い継がれている。

本稿は、董永説話の変遷を文学史的に展望してみようという試みである。

説話は、説かれている中に、話に尾ヒレがつくが、時代が変われば、その時代にあわない尾ヒレはとれて、その時代にあう尾ヒレがまた語り増されてゆく。そして説話から、職業化された語り物、演劇へと発展していく過程でストーリーの増減が如何になされたのかを概観してみようというのである。

61 「董永賣身・董永自賣・賣身葬父」などと呼ばれる「孝子説話」は、最終的には、父権に対する反抗と自由恋愛

董永の名が資料中に現れるのは、現在確認できる範囲で、曹植『靈芝篇』中の以下の八句が、最も古いものであると思われる。

董永遭家貧 董永 家の貧しきに遭ふ

父老財無遺 父老いて財の遺る無し

擧假以供養 擧げて假りて以て供養し

傭作致甘肥 傭作して甘肥を致す

賣家填門至 賣家 門を填めて至る

不知用何歸 何を用って歸らしむるを知らず

天靈感至徳 天靈 至徳に感じ

神女爲秉機 神女爲に機を秉る

董永は家が貧しく、父は老いて財を残してくれなかった。そこで借金をして親を養い、日雇い仕事をして美味しい肉を持って帰る。借金取りが大勢やってくる（責は債に通ず）が、どうすればお帰ってくれるのか判らない。天の神がその孝行に感動し、神女が彼のために機を織った、というのである。

孝子を列挙して讚えた長詩の一節なので、ストーリーというほどの物ではないし、まだ「賣身葬父」というモチー

フは現れていないが、すでに後漢の末年（二世紀）には「董永という孝子」の話が出現していたようである。

その後、六朝から唐代にかけて、この説話がどのように展開されていったのかを、確認できる資料は、厳密に言えば全くない。

『劉向孝子傳』・『干寶搜神記』などと呼ばれているものも、全て後世（北宋初期。十世紀）に抄録されたものと、その抄録に基づいて再構成されたものである。<sup>(2)</sup>

### 一 北宋初期に抄録された『孝子傳』（あるいは『孝子圖』）と『搜神記』

（劉向孝子圖）又曰、前漢董永千乘人、少失母、獨養父、父亡無以葬、乃從人貸錢一萬、永謂錢主曰、後若無錢還君、當以身作奴、主甚愍之、永得錢葬父畢、將往爲奴、於路忽逢一婦人、求爲永妻、永曰、今貧若是、身復爲奴、何敢屈夫人之爲妻、婦人曰、願意君婦、不恥貧賤、永遂將婦人至錢主、曰、本言一人、今何有二、永曰、言一得二、理何乖乎、主問永妻曰、何能、妻曰、能織耳、主曰、爲我織千疋絹、即放爾夫妻、於是索絲、十日之内、千疋絹足、主驚、遂放夫婦二人而去、行至本相逢處、乃謂永曰、我是天之織女、感君至孝、天使我償之、今君事了、不得么停、語訖、雲霧四垂、忽飛而去

『太平御覽』卷四百十一

孝子傳曰、董永性至孝而家貧、父死、賣身以備棺、斂即葬、即詣主人、將償其直、路逢一女子云、能織願爲永妻、永不得已與同詣、主人問其故、永具以對、主人曰、必爾者、但令爾婦、爲我織縑百疋、於是、妻爲主人、織十日百疋具焉、主人大驚、即遣永夫妻、妻出門謂永曰、我天之織女也、卿篤孝賣身葬父、故天使我爲卿償債耳、言終忽然不見

『太平御覽』卷八百二十六

董永は千乗の人で、父が死に葬式が出せないで、錢を借りる。帰せないで奴となつて返すこととする。葬式を終え、奴となりに出かける途中、婦人に出逢い、求められて結婚する。錢主のもとで、十日で求められた絹を織り、解放される。織女が天から使わされ、永を助けたのだと明かされ、女は去る。

一方で「十日千疋絹」とあり、一方で「十日百疋縑」とあるのは、抄録・伝写の際の誤りであろう。この二則には、ストーリー上の相違はない。<sup>3)</sup>

「賣身葬父」というモチーフが現れるが、借りた金額は記していない。

『搜神記』を出典とするもの二則では、やや錢主のあつかいが変わってくるし、金額の記載もある。

#### 『董永』

漢董永千乘人。少偏孤。與父居、肆力田畝、鹿車載自隨。父亡無以葬、乃自賣為奴、以供喪事。主人知其賢、與錢一萬遺之。永行三年喪畢、欲還主人、供其奴職。道逢一婦人曰、願為子妻。遂與之。主人謂永曰、以錢與君矣。永曰、蒙君之惠、父喪收藏。永雖小人、必欲服勤致力、以報厚德。主曰、婦人何能。永曰、能織。主曰、必爾者、但令君婦為我織縑百疋。於是永妻為主人家織、十日而畢。女出門謂永曰、我天之織女也。緣君至孝、天帝令我助君償債耳。語畢凌空而去、不知所往。

干寶『搜神記』卷一

#### 『董永妻』

董永父亡。無以葬。乃自賣為奴。主知其賢。與錢千萬遺之。永行三年喪畢。欲還詣主。供其奴職。道逢一婦人曰。願為子妻。遂與之俱。主謂永曰。以錢丐君矣。永曰。蒙君之恩。父喪收藏。永雖小人。必欲服勤致力。以報

厚德。主曰。婦人何能。永曰。能織。主曰。必爾者。但令君婦爲我織縑百匹。於是永妻爲主人家織。十日而百匹具焉。出搜神記

『太平廣記』卷五十九

「與錢一萬遺之」あるいは「與錢千萬遺之」と金額があるが、「千萬」はやはり抄録・伝写の際の誤りであろう。一方で、錢主（まだ姓はない<sup>4</sup>）が、慈善家のように描かれている。「主人謂永曰、以錢與君矣」あるいは「主謂永曰。以錢丐君矣」と、返済を要しないかのような書き方である。

こう並べて見るに、『太平御覽』が引く『孝子傳』・『孝子圖』と、『搜神記』では、抄録する際に用いたテキストが、異なる物であった可能性がかなり強いのではないかと考えられる。

## 一一 唐末の敦煌文書

清朝末期に発見され、イギリスのオーレル・スタインと、フランスのポール・ペリオによって持ち出され、現在大英博物館とフランス国立図書館に収蔵されている、所謂、『敦煌文獻』の中に、董永に関する物が数点ある<sup>5</sup>。

一点は「變文」と呼ばれる語り物で（スタイン目録2204）ある。

本来、變文というものは、難解な佛教の教義を大衆に解りやすい言葉で説くものであった。

しかし『董永變文』は特に佛教と関係のあるものではなく、明らかに大衆への布教から、商業的な興業へと変質していく過程にあるものである。

当然、大衆に興味を持たせるために、創作した部分もかなり多い。全部で七言百十四句に及ぶ長篇なので、ストーリーの変化が解る範囲で梗概を記すにとどめる。

十五の時に二親を亡くした董永は、仲介人に騙されて借金をする。葬式を終え、錢主のもとに向かう途中、女子に遭う。女子は天帝が董永の孝儀に感動し使わされたことを告げて、夫婦になろうと言う。錢主のもとで千疋強の錦を織り、解放されて帰る途中、出遭った場所で女は雲に乗り昇天する。(この箇所、少し脱文あるか?) 子供によい子でいなさいと別れを告げる。董仲(子の名)七歳の時、遊び仲間「母無し子」と罵られ、父に訳を訊ねる。母親を捜す決心をして、董仲は孫賓を尋ねて占ってもらい、「阿耨池あくとくちに水浴びに来る三人のうちに母がいる。その紫の衣裳を取れ」と教えられそれとおりにする。母は訳を聞いて、金の瓶を持たせ、孫賓に届けさせる。その瓶から火が出て孫賓の書物が焼け、これから天上界のことは知ることができなくなった、というものである。脱文が多く、うまく筋がつかない部分も多いが、董永と天女の間の子供ができ、その子が母を捜すというのは、あきらかに別の説話(俗に言う「羽衣伝説」)の焼き直しである。

敦煌文書には、干寶ではなく、句道興撰と称する『搜神記』がある。

昔劉向孝子圖曰：有董永者、千乘人也。小失其母、獨養老父、家貧困苦、至於農月、與轆車推父於田頭樹蔭下、與人客作、供養不闕。其父亡歿、無物葬送、遂從主人家典田、貸錢十萬文。語主人曰：「後無錢還主人時、求與歿身主人爲奴一世常力。」葬父已了、欲向主人家去。在路逢一女、願與永爲妻。永曰：「孤窮如此、身復與他人爲奴、恐屈娘子。」女曰：「不嫌君貧、心相願矣、不爲恥也。」永遂共到主人家。主人曰：「本期一人、今二人來何也？」主人問曰：「女有何伎能？」女曰：「我解織。」主人曰：「與我織絹三百疋、放汝夫妻歸家。」汝織經一旬、得絹三百疋。主人驚怪、遂放夫妻歸還。行至本相見之處、女辭永曰：「我是天女、見君行孝、天遣我借君償債、今既償了、不得久住。」語訖、遂飛上天。前漢人也。

『句道興搜神記』

「遂從主人家典田」とある部分を除いて特に大きな変化はない。ペリオ文書2621に、撰者名のない『孝子傳』がある。

董永、千乘人也。少失其母、獨養於父、家貧傭力、篤於孝養。至於農月、永以鹿車推父至於畔上、供養如故。後數載、父終、葬送不辦。遂(与) 聖人(貸) 錢一万、即千貫也、將殯其父。葬殯已畢、遂來償債。道逢一女、願欲與永爲妻。永曰：「僕貧寒如是、父終無已殯送、取主人錢一万、今充身償債爲奴、烏敢屈娘子。」婦人曰：「心 所相樂、誠不耻也。」永不得已、遂與婦人同詣主人。主人曰：「汝本言一身、今二人同至、何也？」永曰：「買一得二、何怪也。」「有何所解也？」答曰：「會織絹。」主人(云)：「但與(織) 絹三百疋、放汝夫妻販還。」涓(織) 經一句、得涓三百疋。主人驚怪、遂放二人歸迴。行至本期之處、妻辭曰：「我是天之織女、見君至孝、天帝故我助君償債。今既免子之難、不合久在人間。」語訖、昇天。永掩淚不已。天子徵永、拜爲御史大夫、出孝子傳。

最後の「天子徵永、拜爲御史大夫」の部分が特に注目される部分である。まったく理由は不明であるが、故の説話に、「立身出世」が結びつくのはこれが初めである。

### 三 宋の説話に基づくと思われる白話小説

白話小説『董永遇仙傳』は、明の嘉靖二十(一六三〇)年(十六世紀中葉)に板行された『清平山堂話本』のうち『雨窗欵枕集』にある。『清平山堂話本』は話本である可能性が高いと言われている。<sup>7)</sup>

やはり字数の多いものなので、ストーリーの変化が解る範囲で梗概を記すにとどめる。

東漢の中和年間、淮南潤州府丹陽縣董槐村の董永、字は延平は幼いころより学問に励む。母はなく父親に孝をつくすが、早魃に襲われ、傳家のほどこしを受ける。父が死んだが葬式が出せず、傳家に三年の賣身を約束し一千貫の錢を借り、葬式を終える。天帝が織女に百日の間董永を助けるように命令する。傳家に赴く途中、槐樹の下で董永と織女は出遭い、結婚する。傳家で三百疋を織る約束をし、毎夜天女の加勢を得て織り上げて帰る。槐の樹の下で分かれる際、妊娠を告げられる。傳家では、三百疋がみな龍と鳳凰の模様なので、朝廷に献上する。皇帝は事情を聞き、董永の孝を嘉し、兵部尚書に抜擢する。その後、董永は傳家の娘を娶る。織女が董仲舒と名付けた男児を届けてくる。仲舒は十二歳の時に塾び仲間「母無し子」と罵られ、父に訳を聞き、母を訪ねる決心をする。董永が嚴君平に聞くように勧める。君平は七月七日太白山に七人の仙女が藥草を取りに来る。その七人のうち黄色い衣を着た人が母だと告げる。仲舒は太白山に出かけ母と対面する。金の瓶と銀の瓶をわたされ、君平に届けた金の瓶からは火が出て占いの書が焼けてしまう。仲舒は銀中の瓶の仙米を食べ、董永の死後、昇天して鶴神となる。

基本的なストーリーは「董永變文」と大差はないが、董永の出身地が、千乘（山東）から丹陽（江蘇）に移り、字もある読書人に変わっている。錢主は傳家となるが傳は富と同音である。

織女が織った絹が献上され、董永の孝が嘉せられて出世するというのは、敦煌本『孝子傳』の理由不明の出世よりは、理由があるだけ話としては進歩しているわけだが、「孝廉」であるというだけですぐに兵部尚書というのは、どの時代であれかなり無理がある。董仲が董仲舒と漢の大儒者を思わせる名になる。占者が孫賓から嚴君平になる。嚴君平は漢代の四川成都の伝説的占者である。このあたりは漢代の有名人を適当に並べただけのようである。

仲舒の母を尋ねる旅は、阿耨池あんどうが太白山に変わり、「水浴びに来る三人のうち紫の衣の母」が、「葉草取りに来る七人のうち黄色の衣の母」に変わる。金瓶から火が出るて書物を焼くのは同じだが、銀瓶の仙米は初出であり、昇



天して、仲舒が鶴神になる、というのも他の例を知らない。

小説としては、荒唐無稽ではあるが、首尾がやつと揃ったという印象である。ようやく次の時代に演劇として飛躍する基礎が固まったと言えるのではなからうか。

注 引用原文の句読について、読点のみのは筆者による。主に木版本の影印本からの引用である。排印本については原書に従った。なお、小論の目的はストーリーの変遷を追う点にあるので、大筋に関係のない衍字・脱字・誤字等は、煩を避けるためにちいち注記しない。

(1) 嚴鳳英・王少勛主演。石揮監督。現在はDVD化されている。中国唱片上海公司出版。

(2) 劉向『孝子傳』あるいは『孝子圖』は、「前漢の董永」とあることと、史書に記載がないことが、偽書である根拠とされている。

『搜神記』のテキストについての批判は、『四庫全書総目提要』・王謨『搜神記跋』・沈士龍、胡震亨『搜神記引』・毛晉『搜神記跋』・余嘉錫『四庫提要辨證』などに詳しい。

(3) 煩を避け全文の引用は省くが、『法苑珠林』巻六十二に引く『劉向孝子傳』は、ほぼ同様の文章であるが、「三百疋」とある。また、『太平御覽』巻八百一十七には、

孝子傳曰、董永父終、貧不遂葬、以身質錢一萬、既葬就後、逢一女子、求與永妻、妻云能織絹、永詣主人、主人令織一旬三百疋、償足、女辭去曰、我天之織女也、帝見君孝、使我共償耳、因遂不見 事具孝感門

とある。事具孝感門と注記があるので、巻四百十一より簡略な引用に止めたのであろう。

(4) 『法苑珠林』巻六十二に引く『劉向孝子傳』は、普通名詞か固有名詞か明らかではないが「富家」とある。

(5) 以下の敦煌文書の原文は、潘重規編『敦煌變文集新書』文津出版社。一九九四年十二月。臺北。による。

(6) 『田崑崙』句道興『搜神記』。

(7) 入谷義高『宋・元・明通俗小説選』解説。平凡社『中国古典文学大系』25。五三七頁。